

15 世紀フィレンツェにおける res publica と「共和国」

三 森 のぞみ

はじめに

「共和政」や「共和国」を表す republic, république, Republik, repubblica といった近代語は、周知のように、ラテン語の res publica（レース・プーブリカ）に由来している。単純に訳せば「公のもの／こと」となるこの語が、近世に入っても、「君主政」や「君主国」に対置される今日的な「共和政」や「共和国」の意味に限定されなかったことは、君主国家を論じたジャン・ボダンの主著『国家論』の原タイトルが *Les six livres de la République*（1576 年）であった事実によって、よく知られる。また、日本でも現在、東欧近世史研究者を中心に「王のいる共和政」が考察され、res publica の歴史的な含意に対する理解が進みつつある⁽¹⁾。

こうしたなかでも、イタリアではいち早く res publica が近代的な「共和政」や「共和国」の意味を獲得し、フィレンツェがその先鞭をつけたとされてきた。かつて H・バロンは 15 世紀前半のフィレンツェ書記官長レオナルド・ブルーニの著作中に近代共和主義の出発点を見いだし⁽²⁾、これを敷衍して J・G・A・ポーコックは『マキアヴェリアン・モーメント』を執筆した⁽³⁾。しかしながら、J・ハンキンズなどが近年指摘するのとおり、15 世紀以降にイタリアの都市史料

や人文主義者の著作に頻出する *res publica* は「共和政」や「共和国」のみを指していたわけではなく、ブルーニも近代的な意味での共和主義者とは見做せない⁽⁴⁾。とはいえ、15世紀のフィレンツェにおいて、*res publica* が公的文書中に「共和政」や「共和国」の意味で用いられ始めたこともまた事実である。当初はプロパガンダ的な「自称」に過ぎなかった「フィレンツェ共和国」*Respublica florentina* が、15世紀末になると対外的にも承認されていくことが外交条約などから確認できる。

本稿では、14世紀末から15世紀のフィレンツェに現れる *res publica* を当時の歴史的な文脈の中で検討し、この語が具体的にどのような形で使用され、「共和国」の意味をもつに至ったかについて一定の整理を試みることにしたい。それは、*res publica* が包含する多義性、重層性を照射することにもなるであろう。ただし、ここで祖上に載せる「共和国」は、近代の「共和国」と全く等しいものではない。近代的な主権国家の存在しないこの時代において「主権」は相対的な性格を有しており、「国家」、「都市」、さらに群小な政治勢力が峻別されることなく、政治権力の緩やかなグラデーションの中に存在していた⁽⁵⁾。単独の支配者をもたないまま中世都市の自治の範疇を超え、イタリアの列強のひとつとなったフィレンツェが、自身の政体の名称とし、さらに対外的な承認を得た *res publica* が、（たとえそれが可変的、相対的であったとしても）本稿で扱う「共和国」である。

1. 中世の *res publica*

古代ローマの *res publica* は非常に曖昧な言葉で、共和政から帝政へ至る長い時代にその意味も変化していった⁽⁶⁾。「*res publica* は *populus*（ポプルス）のもの」⁽⁷⁾であり、法における合意と共通の利益で結ばれた人々の集まりであるとするキケローの有名な定義（『国家について』*De re publica* 第1巻39節）は、アウグスティヌスの『神の国』（第2巻第21章）⁽⁸⁾を通じて中世にも伝えられ

たが、そこに「共和政」そのものの意味があるとは言えない。

中世において、res publica は「キリスト教世界」respublica christiana、「帝国」respublica imperii、「王国」respublica regni などのように用いられた⁽⁹⁾。res publica は特定の政体を指すものではなく、「共同体」、あるいはそうした共同体を成り立たせるための「共通善」を意味し、13 世紀以降、法学者はさまざまな共同体に res publica の資格を与えていった。コムーネと呼ばれる都市民の政治共同体によって高度な自治が行われるようになったイタリア諸都市を、14 世紀の法律家バルトルスは「事実において上位者を認めない都市はそれ自体が君主である」としたが、こうした都市も res publica と定義されることになる。とはいえ、都市の「自由」は皇帝と教皇という普遍的な至高権を前提としたものであり、形式上、帝権支配下にあった北・中部イタリア諸都市は、帝国の res publica 内部に位置づけられる存在でもあった。さらに、これらの都市の多くではすでに、都市の全権を移譲された単独支配者シニョーレが統治を行うシニョリーア制が広まっており、res publica と定義された都市が必ずしも共和政の下にあったわけではなかった。

また、「共同体」や「共通善」としての res publica という表現が、法学や政治思想に関する著作の枠を越えて、中世の文書に広く用いられていたとも言い難かった。フィレンツェに例をとるならば、14 世紀まで、都市条例や評議会の議決、外交関連の都市文書中に、res publica（あるいは、むしろこの 2 語を 1 語化した respublica）をそれほど多く見いだすことはできない⁽¹⁰⁾。当時の社会像や歴史観をよく映し出し、同時代の語の意味、語感を知る上で大きな指標となり得る年代記のような歴史叙述においても、res publica、あるいはその俗語訳である repubblica ないし republica の使用は僅かな例に限られている⁽¹¹⁾。中世フィレンツェの年代記で最も有名なジョヴァンニ・ヴィッラーニの『新年代記』（1320 頃 -1348 年）は現行校訂版で全 3 巻、計 2000 頁に近い大著だが、repubblica/repubblica が登場するのは 25 回程度に過ぎず、それらの多くは「共

同体」や「共通善」の意味合いで用いられている⁽¹²⁾。確かに、「我々の *republica* を統治する」⁽¹³⁾や、「フィレンツェの *republica* の自由」⁽¹⁴⁾といった表現もあるが、これらは「都市」*città* の言い換えと考えてよく、「共和政」や「共和国」を含意しているわけではない。

フィレンツェの都市権力は、都市条例や議決、外交文書においても、また年代記においても、「都市フィレンツェ」*civitas Florentie, città di Firenze* とされるか、より多くは、「フィレンツェのコムーネ」*Commune Florentie, Comune di Firenze* や、「フィレンツェのポーポロとコムーネ」*Populus et Commune Florentie, Popolo e Comune di Firenze*⁽¹⁵⁾と言い表されるのが常であった。14 世紀までのフィレンツェで *res publica* が特定の政体を示すことはなく、まして「共和政」や「共和国」の意味をもつことなどなかったのである。

2. 領域国家フィレンツェの *res publica*

イタリア北・中部のコムーネ都市はその発展過程の中でコンタードと呼ばれる固有の周辺支配領域を得たが、14 世紀後半から 15 世紀前半にかけて、ミラノ、フィレンツェ、ヴェネツィアはそれをはるかに越え、近隣の諸都市とその周辺支配領域を取り込む広域支配を実現した。フィレンツェでは、長年のライバル都市ピサなどを含むトスカーナ地方の過半がその支配下に入るとともに、権力の集中が進み、政治の実権を握るエリート市民層が形成された。このような広域支配と集権化によって生まれた政治秩序を、研究者は一般に「領域国家」と呼んでいる⁽¹⁶⁾。

res publica は、この変革期にフィレンツェの都市文書中に頻繁に登場するようになる。毛織物業の下層労働者がごく短期間ながら市政を動かし、上層市民を震撼させた「チョンビの乱」の終結直後、1378 年 9 月に緊急招集された「住民総会」では、「都市フィレンツェと *respublica* 全体の良き状態のために」「コムーネの *respublica* 全体を改革する必要がある…」と議決された⁽¹⁷⁾。1393 年 8

月の都市評議会では、「フィレンツェの傭兵隊長」として名を馳せたイングラント人ジョン・ホークウッドが「フィレンツェの *respublica* の栄光と偉大さ」のために為した偉業が称えられ、記念のモニュメントを建立することが決定された⁽¹⁸⁾。1375 年から 1406 年に没するまで長きに渡ってフィレンツェ書記官長職を務めた人文主義者コルッチョ・サルターティは、ピストイア近郊の小村の出身でフィレンツェ市民ではなかったが、1400 年 11 月、「フィレンツェの *respublica* の務め」をよくしたとして、彼自身とその子孫にフィレンツェ市民と同等の権利が認められた⁽¹⁹⁾。さらに、領域国家の正統性を法的に示そうとした 1409 年の新都市条例第 1 条では、これを起草した法律家ジョヴァンニ・ダ・モンテグラナローを「フィレンツェの *res publica* に特別な好意を示した」と称賛している⁽²⁰⁾。*res publica* はいずれも領域国家化するフィレンツェの力を誇示し、その栄光を称える文脈で用いられている。

外交上、フィレンツェの「公称」として用いられたのは、変わらず「フィレンツェのコムーネ」、「フィレンツェのポーポロとコムーネ」であったが、*res publica* は新しい領域国家フィレンツェの正統性を強調するプロパガンダ的な言説の中で好んで用いられるようになった⁽²¹⁾。こうした言説は、都市行政の実務を担う職業的な知識人（人文主義者）と政治を支配するエリート市民の協働から生み出された。文書業務の枢要を占めた書記官長は、外交書簡の執筆などを通じて対外的なスポークスマンの役割も果たしたが、サルターティ以降、同職には人文主義者が就き、古典に見いだされる事例を引きつつ、古典ラテン語の語彙や言い回しに則った文書を作成した⁽²²⁾。また、政治討議の場では、一定レベルの人文主義教育を受けたエリート市民が古典的な言い回しや古典の事例を挙げて発言するようになった⁽²³⁾。

彼らエリート市民たちは、内外の政治や法の諸制度を大胆に改変し、領域国家フィレンツェの、より「主権的」な支配の正統性を主張しようとしていた⁽²⁴⁾。古典ラテン語である *res publica* は、コムーネ *commune* という中世の語に比べ、

新しい「領域国家」フィレンツェを言い表すのにより相応しいものと見做されたはずである。コムーネ都市の枠を越えて強大化したフィレンツェにとって、（たとえ実態は寡頭政であろうと、君主のいない）共和政体であるかぎり、君主政体が多勢を占める当時のヨーロッパ世界の中に自らの支配の正統性の根拠を求めることは難しかったが、それを古代の共和政ローマに求め、ローマの「自由」に倣って自らの「自由」を称えることはできた。さらに、同時代のフィレンツェの都市文書では、領域国家という新しい政治秩序を何らかの形で表現するために、*res publica*に加えて、*populus*や*dominium*などの語が用いられたことが指摘されている⁽²⁵⁾。逆に言えば、「国家」*Stato*という言葉が確立していない時代に、「領域国家」という現実を言い表すために選ばれた語のひとつが、*res publica*であったといえる⁽²⁶⁾。

従って、*res publica*がフィレンツェの政体を表す語として使用されるようになったとしても、それが直線的に「共和政」や「共和国」の意味につながったわけではない。サルターティは外交書簡で*res publica*の語をよく用いており⁽²⁷⁾、フィレンツェの政体を*res publica*と言い表してもいるが、それは君主政の対義語ではなく、サルターティが君主政を否定することもなかった⁽²⁸⁾。1390年代以降のミラノとの抗争期に、サルターティの外交書簡は、共和政フィレンツェの「自由」を共和政ローマの「自由」に重ね合わせて雄弁に称揚した。さらに、ミラノ公の秘書官アントニオ・ロスキによるフィレンツェ批判に抗し、サルターティは『アントニオ・ロスキ論駁』（1403年）を執筆してフィレンツェの政体を擁護し、ミラノ公の政治を非難した⁽²⁹⁾。しかしながら、サルターティが否定したのは、君主政そのものではなく、専制君主としてのミラノ公であった。ミラノ公は、皇帝代官職を隠れ蓑にしてイタリアにおける神聖ローマ帝国の正しい支配を専制に変えた、皇帝の大敵と断じられている⁽³⁰⁾。

3. ブルーニの res publica

帝権の権威を自明の前提とし、中世的な秩序の中に留まっていたサルターティに対し、領域国家の主張をさらに推し進め、新たなフィレンツェの「国家」像を明確に提示したのが、サルターティに学び、師と同じくフィレンツェ書記官長職を 1444 年に没するまで務めた人文主義者レオナルド・ブルーニであった。

領域国家化を牽引したエリート市民層の要請を受け、ブルーニが執筆した主著『フィレンツェ人の歴史』*Historiae Florentini Populi*⁽³¹⁾ (1416-1442 年) は、ジョヴァンニ・ヴィッラーニの『新年代記』に代表される伝統的なコムーネ都市像を塗り替え、フィレンツェが帝権のくびきから脱して、普遍的な権威に拠ることなく、「主権的」な権力をもつ「国家」に至る姿を描いた⁽³²⁾。ルネサンス人文主義における最初の、そしておそらく最も重要な歴史書である『フィレンツェ人の歴史』は、初のフィレンツェ正史として公的なシンボル性を有し、都市政府の命によって俗語訳も作成されている⁽³³⁾。

現在最も信頼できる同作の刊本は全 3 巻、総計 1300 頁弱と大部なものの、英語対訳版であるため、原文の長さはヴィッラーニの『新年代記』の半分にも満たない⁽³⁴⁾。それにもかかわらず、同作品中には res publica の表記が 250 回ほど数えられる。人文主義者ブルーニが古典ラテン語に則った文体や語彙を重んじたこともあるとはいえ、その頻度は非常に高い。しかしながら、それぞれの res publica が意味するところは多様である。『フィレンツェ人の歴史』を英訳したハンキンズは実際、res publica の訳語として commonwealth, government, public affairs, public good, regime, republic, state など、文脈に合わせてさまざまに異なる表現を選んでいる。

ハンキンズが指摘するように、ブルーニが res publica を近代的な「共和政」や「共和国」の意味で使っているとは言い難い⁽³⁵⁾。第 1 巻で古代について語る

くたりでは、res publica を帝政ローマの意で用いている⁽³⁶⁾。また、「フィレンツェ共和国」Respublica florentina といった表記も見あたらない。それでも、実質的な歴史叙述が開始される1250年以降において、ブルーニはres publica をフィレンツェ、ピサ、アレツォなど共和政下にあった都市を指して用いており⁽³⁷⁾、例えば、ナポリ「王国」regnumなどをres publica とするような例は見いだせない。res publica が「共和政」あるいは「共和国」を明確に指しているわけではないにしろ、「共同体」や「共通善」の意味に限定されてもいない。書記官長であるブルーニが当時の政治エリート層の歴史観を具現化した『フィレンツェ人の歴史』は、現実に関共和政体であったフィレンツェが主権的な権力をもつ「国家」であることの正統性を示そうとしたものであった⁽³⁸⁾。語義はいまだ揺らいではいるものの、作中のres publica はこうした意図の下で「共和政」や「共和国」の意味に近づいたといえよう。

さらにブルーニとres publica の関係で注目されるのは、1438年にブルーニが公にしたアリストテレス『政治学』のラテン語訳において、*πολιτεία/politeia* (ポリーテイアー) の訳語にres publica があてられたことであり、これがres publica の新しい意味を後世にもたらす一助となった⁽³⁹⁾。

アリストテレスは『政治学』第3巻第7章で、「国制」には一人支配、少数支配、多数支配の3種があり、そのそれぞれについて、公共の利益を目指す正しい政体と、腐敗に陥った悪しき政体があるとし、政体を計6つに分類している⁽⁴⁰⁾。この「国制」が*πολιτεία* であるが、アリストテレスはここで「国制」一般のみならず、多数支配による正しい「国制」をも、同じく*πολιτεία* と呼んでいる。つまり、*πολιτεία* は、単なる「国制」に加え、多数支配による正しい「国制」という個別の意味をもったのである。

『政治学』については、すでに13世紀にドミニコ会士ムールベケのガイレルムスが訳出したラテン語版が存在したが、ガイレルムスは*πολιτεία* を音訳し、*politia* (ポリーテイアー) としていた⁽⁴¹⁾。トマス・アクィナスの註釈がこれに

付されたこともあり、ゲイレルムスのラテン語訳は中世に広く読まれた。この *politia* という音訳を、ブルーニは *res publica* に置き換えたのであった⁽⁴²⁾。ハンキンズによれば、1420 年代前半にブルーニはすでに『政治学』のラテン語訳に取り組んでいたらしい⁽⁴³⁾。ブルーニの翻訳論である『正しい翻訳について』（1420-1426 年頃）において、彼はゲイレルムスの訳に強烈な非難を浴びせている。

「ギリシア語のままになっている語がこれほど多くあって、彼〔ゲイレルムス〕の訳が半分ギリシア語のようであることについて、いったい何と言うべきであろうか？ しかるに、ギリシア語で言い表せることで、ラテン語で言い表せないものなどないのだ！ 少数の外来の語や難解な語についてラテン語にうまく訳せないというのであれば、容赦しよう。しかし、最良の訳語があるものをギリシア語のままにしておくのは、無知きわまりないことである。なぜ、*politia* をギリシア語のままにしておくのか、ラテン語で *res publica* と言うことができるし、言うべきであるのに？」⁽⁴⁴⁾

ブルーニが訳語に *res publica* を選択した理由として、ハンキンズは『正しい翻訳について』の上記の引用箇所を引きつつ、ラテン語のあるべき用法の追求や、ラテン語の言語としての表現能力の擁護といった言語面の要素を挙げ、よく言われてきたフィレンツェ共和政イデオロギーの喧伝というプロパガンダ的な可能性には否定的な見解を示している⁽⁴⁵⁾。とはいえ、言語的な動機と政治的な意図は決して相反するものではない。ブルーニは自ら、訳出した『政治学』を教皇エウゲニウス 4 世に献呈し、さらにナポリ王アルフォンソやシエナ都市政府などにも写本を送って、広く世に問うている⁽⁴⁶⁾。書記官長の新訳の中に、人文主義者としての言語的な探究心のみならず、フィレンツェの政体によりポジティブなイメージをもたらし狙いがあったとしても不思議ではない⁽⁴⁷⁾。

いずれにしろ、ブルーニのラテン語訳は大きな成功を収め、ゲイレルムス訳に代わってトマス・アキナスの註釈と組み合わせられ、近世ヨーロッパにおけ

る『政治学』のスタンダード版となった⁽⁴⁸⁾。キケローがプラトン『政治学』*πολιτεία*のタイトルを *res publica* と訳したケースがあったとはいえ、古代ローマ時代にギリシア語の *πολιτεία* とラテン語の *res publica* は一対一対応の訳語関係にはなかった⁽⁴⁹⁾。従って、15世紀のブルーニ訳によって初めて、*res publica* はアリストテレスの多数支配による正しい「国制」としての *πολιτεία* と完全に同一視されたことになる⁽⁵⁰⁾。ハンキンズらが指摘するように、ブルーニ自身は近代的な意味での「共和主義者」ではないし、個人的に「共和政」を擁護したわけでもなかったが、『政治学』を訳出する際、彼が書記官長として見つめてきた現実のフィレンツェ政体を全く念頭に置かなかったとまでは思われない。ブルーニ自身の意識がどうあれ、*res publica* が近代的な意味、すなわち、君主のいない「共和政」、「共和国」の意味を獲得する上で、フィレンツェ共和政体の実在と書記官長ブルーニの選択は大きな一歩をもたらしたといえるのではないだろうか。

4. フィレンツェ「共和国」の成立？

res publica は14世紀末からフィレンツェの都市文書に頻出し始め、サルターティやブルーニを始めとする人文主義者やエリート市民にとって馴染みの語となっていたが、15世紀に入ってしばらくすると、一般市民による俗語の著作に *republica/repubblica* が以前よりも頻繁に見られるようになる⁽⁵¹⁾。

例えば、1420年代末から40年代末にかけて2部作の『フィレンツェ史』を書き綴ったジョヴァンニ・カヴァルカンティの文章には、しばしば *repubblica* が登場する。カヴァルカンティはフィレンツェを「我らの *repubblica*」と記し、また、*repubblica* と君主 *signore* の政体を区別していると思われる箇所もある⁽⁵²⁾。カヴァルカンティはフィレンツェ旧家の傍系で参政権を持つ市民であったが、権力中枢から排除された市井の人であった。同じくフィレンツェ市民のマッテオ・バルミエーリは、当時を代表する人文主義者の1人であるため、一般

的な例には当たらないかもしれないが、彼が 1430 年代に俗語で執筆した『市民生活論』では、まさに *republica* に対する市民の務めが論じられている⁽⁵³⁾。文中では *republica* の形態に特に触れられていないものの、フィレンツェの政体が想定されていることは間違いない。こうして 15 世紀後半には、*repubblica* が「共和政」や「共和国」の意味で一般に解されるようになっていったと思われる。1494 年のメディチ体制瓦解後にフィレンツェ市政に強い影響力を及ぼしたフェッラーラ出身のドミニコ会士ジローラモ・サヴォナローラは、1496 年の説教で、自身が設立に尽力した大評議会の重要性を示すため、フィレンツェの最高権力機関である大評議會を滅ぼすことは大逆罪であり、君主を殺した者が死刑に処されるなら、*repubblica* を殺す者も同罪だと、フィレンツェの人びとに訴えた⁽⁵⁴⁾。幅広い社会階層に向けて語りかけられた説教の中で、他都市出身のサヴォナローラが君主と *repubblica* を対比的に述べている事実は、「共和政」の意味での *repubblica* の定着を示す一例であろう⁽⁵⁵⁾。

しかしながら、外交関係において *res publica* がフィレンツェの公称として定着するにはより長い時間を要した。当時の「国家」権力のあいだでどのような名称が用いられていたか確認できるものとして、こうした国家権力が互いを承認し正当化する外交条約の条文を検討してみても、15 世紀を通じてフィレンツェは中世的な「フィレンツェのコムーネ」*Commune florentiae*, *Communitas florentiae* とほぼ記され続けている⁽⁵⁶⁾。例えば、1454 年から翌 1455 年にかけてミラノ、ヴェネツィア、フィレンツェ、教皇、ナポリという五大勢力を中心に結ばれたイタリア同盟は、中世の普遍的な権威を仰ぐことなく各勢力が相互承認によって政治秩序の維持を目指し、世紀後半のイタリア半島に一定の政治的な安定をもたらしたことから、ひとつの画期をつくったとされるが、この同盟の条文においても、フィレンツェは *Communitas* と称されている⁽⁵⁷⁾。

管見の限りでは、外交公文書において「フィレンツェ共和国」*respublica florentina* の名称が用いられた最初期の例は、1468 年に教皇パウルス 2 世が主

宰してイタリア諸勢力間で結ばれた和約である⁽⁵⁸⁾。文中で、フィレンツェから派遣されたオットーネ・ディ・ラーポ・ニッコリーニは「フィレンツェ共和国の」*reipublicae florentinae* 使節とされている。ただし、同じ文中には *communitas florentina* の名称も併用されており、両者のあいだに明確な使い分けは認められない。1480年代にはさらに *res publica* の表記が、いくらか見いだされる。ヴェネツィアとフェッラーラが相争ったフェッラーラ戦争を1484年に終結させたパニョーロの和で、フィレンツェは「フィレンツェ共和国」*Respublica Florentina* と表記された⁽⁵⁹⁾。また、1486年に教皇、ナポリ、ミラノ、フィレンツェのあいだで結ばれた和睦の条文でも、フィレンツェは *Respublica Florentina* とある⁽⁶⁰⁾。16世紀に入ると、「フィレンツェ共和国」は外交条約中により多く確認されるようになる⁽⁶¹⁾。フィレンツェ外交の第一線に立っていたニッコロ・マキアヴェッリが『君主論』（1513-1514年頃）の第1章冒頭で、「すべての政体は、すなわち昔から今までの人びとの上に政治権力を行使してきたすべての支配権は、昔も今も共和政かさもなければ君主政である」⁽⁶²⁾と定義した時には、すでに「フィレンツェ共和国」という名称は外交文書に定着しつつあった。

残念ながら、フィレンツェ都市政府がいつから「フィレンツェ共和国」を外交上の名称として用い始めたのかははっきりとはわからない。しかしながら、15世紀後半にイタリア半島内外の外交活動が活発になるなか、各政治勢力は自らの「国際」的な地位に一層注意を払うようになった⁽⁶³⁾。そこには名称の問題も含まれる。例えば、フィレンツェ都市政府の中枢機関であったプリオーリは、同業組合（アルテ）の代表を起源とすることから、その正式名称を伝統的に「アルテのプリオーリ」*Priores artium* としていたが、1459年に「自由のプリオーリ」*Priores libertatis* へと変更した⁽⁶⁴⁾。「国家」の中枢機関が中世以来の同業組合の代表では都合が悪かったからであろう。「フィレンツェ共和国」の名称もこうした外交上のプレスティージュに関わったはずである。

とはいえ、国名としての「フィレンツェ共和国」の成立過程は決して直線的ではなく、同時期に伝統的な「フィレンツェのコムーネ」の表記が長く併存した⁽⁶⁵⁾。しかも、同一の外交条約の文中で新旧の呼称が使い分けられている場合すらあった。フィレンツェと神聖ローマ皇帝マクシミリアン 1 世が 1509 年に結んだ条約において、皇帝は「フィレンツェ共和国」*Respublica Florentina* に対してその支配領域の「主権」*sovrانيتas* を承認する一方で、フィレンツェは「そのコムーネの名において」*nomine eorum comunitatis* 皇帝への貢納の支払いに同意している⁽⁶⁶⁾。文中には「フィレンツェ共和国」と「フィレンツェのコムーネ」が *ad hoc Rempublicam Florentinam et dictum Comune Florentiae* と併記されてもいる⁽⁶⁷⁾。この貢納は、少なくとも 14 世紀の文書から確認でき、形を変えつつも 16 世紀に入るまで存続したもので、こうした慣習的な関係の中では、帝権にとって、フィレンツェはなお「コムーネ」のままだったのである。

「フィレンツェ共和国」の名称が確定したのは、皮肉なことに、実体としての共和政体が失われたときであったかもしれない。皇帝カール 5 世の軍による攻囲に約 10 ヶ月間耐えた末、1530 年に降伏してメディチ家の帰還を受け入れたフィレンツェは、1532 年の制度改革によって、アレッサンドロ・デ・メディチを終身・世襲の長として戴くことになった。この時、アレッサンドロは「フィレンツェ共和国元首」*Duce della repubblica fiorentina* と宣され、「共和国」の名称が残されたのである⁽⁶⁸⁾。

おわりに

ハンキンズが書いているように、15 世紀のイタリアには近代的な意味での共和政も共和主義も存在せず、G・ベドゥツラの言に従えば、人文主義者の「弱い」共和主義があるのみであった⁽⁶⁹⁾。しかし、まさにこの時期、新たな「国家」の形態を表現しようとした現実政治の要請から、*res publica* に新しい意味が付され、「国家」の政治実践の中で、この新しい意味が根づくことになった。後

代の「共和主義」とは異なり、res publica は、君主政に抗するためではなく、現実の政体に正統性を与えるために選ばれた言葉であったといえる。

フィレンツェ共和国がとうにトスカーナ大公国に変じていた 1612 年、史上初のイタリア語辞典が誕生した。フィレンツェで設立された最古の言語アカデミーであるアッカデーミア・デッラ・クルスカが刊行したこの辞典において、repubblica は「共通善のために人民によって統治され自由な都市／国家 Città の政体を意味する一般的な名称」と定義された⁽⁷⁰⁾。現実の「フィレンツェ共和国」は消滅したが、「共和国」の意味は残ったのであった。

註

- (1) 小倉欣一編『近世ヨーロッパの東と西—共和政の理念と現実』山川出版社、2004 年。
中澤達哉「レス・プブリカ」金澤周作監修『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房、2020 年、146-147 頁。中澤達哉編『王のいる共和政—ジャコパン再考』岩波書店、2022 年など。
- (2) H. Baron, *The Crisis of the Early Italian Renaissance: Civic Humanism and Republican Liberty in an Age of Classicism and Tyranny*, Princeton: Princeton Univ. Press, 1966 (1st ed., 1955).
- (3) J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment. Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*. Princeton: Princeton University Press, 1975. (J・G・A・ポーコック『マキアヴェリアン・モーメント』田中秀夫・奥田敬・森岡邦泰訳、名古屋大学出版会、2008 年)。
- (4) 近年の主な論考として、J. Hankins, “Exclusivist Republicanism and the Non-Monarchical Republic.”, «Political Theory», 38-4 (2010), pp.452-482; J. Hankins, *Virtue politics: soulcraft and statecraft in Renaissance Italy*, Cambridge (Mass.): The Belknap Press of Harvard University Press, 2019; E. I. Mineo, “La repubblica come categoria storica”, «Storica», 15 (2009), pp. 125-167; G. Pedullà, “Humanist Republicanism: Towards a New Paradigm”, «History of Political Thought», 41-1 (2020), pp. 43-95 など。また、イタリア中近世の「共和主義」に関する論集として、F. Ricciardelli, M. Fantoni (eds.), *Republicanism. A Theoretical and Historical Perspective*, Roma: Viella, 2020 が刊行されている。日本語では、徳橋曜「想像のレスプブリカーフィレンツェにおけ

- る共和政理念と現実」小倉欣一編『近世ヨーロッパの東と西』、124-149 頁。
- (5) 佐藤公美「イタリア同盟における戦争と諸国家システム——五世紀イタリア半島の政治空間」『歴史評論』第 838 号 (2020 年)、44-55 頁、ならびに、佐藤公美「第 9 章：境界の領主たちとイタリア同盟——五世紀の領主・小領主国家・帝国封」イタリア史研究会編『イタリア史のフロンティア』昭和堂、2022 年、125-139 頁を参照。
- (6) 古代の res publica については、C. Moatti, “Res Publica, forma Rei Publicae and SPQR”, «Bulletin of the Institute of Classical Studies», 60-1 (2017), pp. 34-48; C. Moatti, *Res publica. Histoire romaine de la chose publique*, Paris: Payard, 2018; C. Moatti, “The Notion of Res Publica and Its Conflicting Meanings at the End of the Roman Republic”, in C. Balmaceda (ed.), *Libertas and Res Publica in the Roman Republic: ideas of Freedom and Roman Politics*, Leiden-Boston: Brill, 2020, pp. 118-137。
- (7) “res publica res populi” は「国家とは国民の物である」(キケロー「国家について」岡道男訳、『キケロー選集』第 8 巻 (哲学 I)、岩波書店、1999 年、37 頁) と訳されるが、populus もまた多義的な語である。
- (8) アウグスティヌス『神の国 (上)』金子晴勇訳、教文館、2014 年、109 頁。
- (9) 中世の res publica の用法については、W. Mager, “Res publica chez les juristes, théologiens et philosophes à la fin du moyen âge: sur l’élaboration d’une notion-clé de la théorie politique moderne”, in *Théologie et droit dans la science politique de l’état moderne. Actes de la table ronde de Rome (12-14 novembre 1987)*, Roma: École Française de Rome, 1991, pp. 233-236 (pp. 229-239); Mineo, “La repubblica come categoria storica”, p. 385。J. Canning, *A history of Medieval Political Thought, 300-1450*, London-New York: Routledge, 2014 も参照。
- (10) *Statuti della Repubblica fiorentina editi a cura di Romolo Caggese. Nuova edizione*, a cura di G. Pinto, F. Salvestrini, A. Zorzi, 2 voll., Firenze: Olschki, 1999; *I capitoli del Comune di Firenze. Inventario e Regesto*, a cura di C. Guasti, A. Gherardi, 2 voll., Firenze: Cellini, 1866-1893 など参照。
- (11) 中世フィレンツェの歴史叙述については、清水廣一郎『中世イタリア商人の世界——ルネサンス前夜の年代記』平凡社、1982 年、拙稿「フィレンツェ歴史叙述の系譜」イタリア史研究会編『イタリア史のフロンティア』昭和堂、2022 年、196-210 頁。フィレンツェの 14 世紀までの年代記として、以下を参照した。*Chronica de origine civitatis Florentiae*, a cura di R. Chellini, Roma: Istituto storico italiano per il Medio Evo, 2009; Sanzanome, “Gesta Florentinorum ab anno 1125 ad annum 1231”, in O. Hartwig (ed.), *Quellen und forschungen zur ältesten geschichte der stadt Florenz*,

- vol. I, Marburg: Elwert, 1875, pp. 1-34; D. Compagni, *Cronica*, introduzione e note di G. Luzzato, Torino: Einaudi, 1968; G. Villani, *Nuova cronica*, a cura di G. Porta, 3 voll., Parma: Guanda, 1990-1991; M. Villani, *Cronica. Con la continuazione di Filippo Villani*, a cura di G. Porta, 2 voll., Parma: Guanda, 1995; *Cronaca fiorentina di Marchionne di Coppo Stefani*, a cura di N. Rodolico, *Rerurum Italicarum Scriptores*, t. XXX, parte I, Città di Castello: S. Lapi, 1903.
- (12) Villani, *Nuova cronica*, 3 voll.
- (13) Villani, *Nuova cronica*, vol. II, p. 28 (Lib. 9, cap. 10).
- (14) Villani, *Nuova cronica*, vol. II, p. 295 (Lib. 13, cap. 3).
- (15) 中世イタリア都市において、ポーポロ *populus/popolo* は一般に新興平民層を指し、彼らが組織した政治共同体も同じくポーポロと称された。
- (16) 当該期のフィレンツェ史の概要は、拙稿「第 3 章第 5 節 フィレンツェ」齊籐寛海編『世界歴史大系イタリア史 2 中世・近世』山川出版社、2020 年、319-322 頁。イタリア史学における領域国家（地域国家）研究については、佐藤公美『中世イタリアの地域と国家—紛争と平和の政治社会史』京都大学出版会、2012 年、245-257 頁。
- (17) R. Fubini, “Il regime di Cosimo de' Medici al suo avvento al potere”, in R. Fubini, *Italia Quattrocentesca. Politica e diplomazia nell'età di Lorenzo il Magnifico*, Milano: Franco Angeli 1994, p. 65. フビーニは、*respublica communis* が⁸ *respublica regni* を踏まえた表現である可能性を指摘している。
- (18) G. Poggi, *Il Duomo di Firenze: documenti sulla decorazione della chiesa e del campanile tratti dall'Archivio dell'Opera*, vol. II, per cura di Giovanni Poggi. Edizione postuma a cura di Margaret Haines, Firenze: Edizioni Medicea, 1988, p. 123.
- (19) *I capitoli del Comune di Firenze*. vol. II, p. 129.
- (20) 1409 年の都市条例については、L. Tanzini, *Statuti e legislazione a Firenze dal 1355 al 1415. Lo Statuto cittadino del 1409*, Firenze: Olschki, 2004. 引用箇所は 31 頁。拙稿「フィレンツェにおける近世的政治秩序の形成」『歴史学研究』第 822 号（2006 年）、5-7 頁も参照。
- (21) R. Fubini, “Diplomazia e governo in Firenze all'avvento dei reggimenti oligarchici”, in R. Fubini, *Quattrocento fiorentino. Politica diplomazia cultura*, 1996, Pisa: Pacini, p. 43. 近隣都市ルッカの都市文書においても、同時期に *res publica* の使用が増加したことが知られる。中谷惣『訴える人びと—イタリア中世都市の司法と政治』名古屋大学出版会、2016 年、328 頁。なお、サルターティはフィレンツェ書記官長となる以前、1369 年からルッカ書記官長を務めていた。

- (22) フィレンツェ書記官長職については、D. Marzi, *La cancelleria della Repubblica Fiorentina*, Firenze: Le Lettere, rist. anast. (1a ed. 1910), 1987, 2 voll.
- (23) G. Brucker, *The Civic World of Early Renaissance Florence*, Princeton: Princeton University Press, 1977, pp. 290-293.
- (24) R. Fubini, “La rivendicazione di Firenze della sovranità statale e il contributo delle «Historiae» di Leonardo Bruni”, in R. Fubini, *Storiografia dell'umanesimo in Italia da Leonardo Bruni ad Annio da Viterbo*, Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 2003, pp. 131-165. 拙稿「フィレンツェにおける近世的政治秩序の形成」1-13 頁も参照。
- (25) Fubini, “Diplomazia e governo”, p. 60. *populus* は中世のポーポロではなく、後述の註(31)と同じく、古代ローマの「国家」をおそらく含意している。
- (26) F・シャポー『ルネサンス・イタリアの〈国家〉・国家観』須藤祐孝編訳、無限社（岡崎）、1993 年、111-155 頁（第 3 章ルネサンス・イタリアの国家観、第 1 節 *stato*）が、マキアヴェッリの時代の *Stato* の用法の揺れを分析している。*repubblica* の例示も多く、有益である。
- (27) Cfr. D. De Rosa, *Coluccio Salutati. Il cancelliere e il pensatore politico*, Firenze: La nuova Italia, 1980.
- (28) Hankins, “Exclusivist Republicanism”, p.466.
- (29) C. Salutati, “Reply to a Slandrous Detractor who has written many wounding things against the Renowned City of Florence”, in *Coluccio Salutati. Political Writings*, ed. by S. Baldassarri, trans. by R. Bagemihl, Cambridge (Mass.): Harvard University Press, 2014, pp. 174-395.
- (30) Salutati, “Reply to a Slandrous Detractor”, pp. 334-335. コルツチョ・サルターティ「僭主論」米山潔弘訳、池上俊一監修『原典イタリア・ルネサンス人文主義』、名古屋大学出版会、2010 年、95-130 頁も参照。
- (31) Florentini *populi* には、古代ローマの *populus* がもつ「国家」の意味が重ねられている。Fubini, “La rivendicazione di Firenze”, p. 141.
- (32) Fubini, “La rivendicazione di Firenze”; R. Fubini, “Note preliminari sugli *Historiarum Florentini Populi libri XII* di Leonardo Bruni”, in Fubini, *Storiografia dell'umanesimo*, pp. 93-110. プルーニの『フィレンツェ人の歴史』については、拙稿「フィレンツェ歴史叙述の系譜」、204-207 頁で簡単に紹介している。
- (33) 俗語訳はドナート・アッチャイウォーリによって 1473 年に完成された。*Istoria fiorentina di Leonardo Aretino, tradotta in volgare da Donato Acciajuoli*, Firenze: F. Le Monnier, 1861.

- (34) L. Bruni, *History of the Florentine People*, 3 voll., ed. and trans. by J. Hankins. Cambridge (Mass.): Harvard University Press, 2001-2007.
- (35) Hankins, “Exclusivist Republicanism”, p. 464. 1427-1428 年に執筆したナンニ・ストロツィ追悼演説において、ブルーニは君主政や寡頭政よりも共和政を正しい政体と見做してフィレンツェ共和政を賛美しているが、その政体を *popularis* と言い表し、*respublica* は「国家」や「政体」一般の意味合いで用いている。“Oratio in funere Iohannis Strozze”, in L. Bruni, *Opere letterarie e politiche*, a cura di P. Viti, Torino: UTET, 1996, pp. 708-749. なお、レオナルド・ブルーニ「ナンニ・デッリ・ストロツィに献げた追悼演説」高田康成訳、池上俊一監修『原典イタリヤ・ルネサンス人文主義』、名古屋大学出版会、2010 年、164-181 頁では、*popularis* の意味をとって「共和政」と訳されている。
- (36) Bruni, *History of the Florentine People*, vol. I, pp. 60-61.
- (37) Cfr. Bruni, *History of the Florentine People*, vol. II, pp. 134, 326, 366, 398, 406, 470. 520; vol. III, pp. 294, 308, 333, 378, ecc.
- (38) Fubini, “La rivendicazione di Firenze”; Fubini, “Note preliminari”.
- (39) 詳細は、Hankins, “Exclusivist Republicanism”。ブルーニとアリストテレスについては、チャールズ・B・シュミット、ブライアン・P・コーペンハイヴァー『ルネサンス哲学』榎本武文訳、平凡社、2003 年、75-83 頁。
- (40) アリストテレス「政治学」神崎繁・相澤康隆・瀬口昌久訳、『新版アリストテレス全集 17 政治学 家政論』岩波書店、2018 年、148-150 頁。
- (41) ムールベケのガイレルムスとブルーニの『政治学』ラテン語訳については、E. Schütrumpf, *The Earliest Translations of Aristotle's Politics and the Creation of Political Terminology*, Paderborn: Wilhelm Fink, 2014.
- (42) 例えば、『政治学』第 3 巻第 7 章「これに対して、大衆が共通の利益を目的として統治する場合には、あらゆる国制に共通する「国制〔共和政〕」という名で呼ばれる」(アリストテレス「政治学」149 頁)は“Quom autem multitudo gubernat ad communem utilitatem vocatur communi nomine omnium res publica”と訳されている。*Politicorum Aristotelis libri octo et Aeconomicarum libri duo*, Leonardo Aretino interprete [Entre 1450 i 1470], Universitat de Barcelona Centre de Recursos per a l’Aprentatge i la Investigació, Manuscrit, Ms. 752, c. 34v. この写本は <https://bipadi.ub.edu/digital/collection/manuscripts/id/33557> から PDF 形式でダウンロードすることができる。
- (43) J. Hankins, “The dates of Leonardo Bruni’s Later Works (1437-1443)”, «Studi medievali e umanistici», 6 (2007), p. 11. ブルーニがイングランド王ヘンリー 5 世の弟、グロ

スター公ハンフリーに宛てた 1434 年 3 月 12 日付の書簡で、ブルーニがグロスター公から『政治学』のラテン語訳を依頼されていたことが知られるが、いつ依頼を受けたかはわからない。

- (44) “Quid de verbis in Greco relictis dicam, que tam multa sunt, ut semigreca quedam eius interpretatio videatur? Atqui nihil grece dictum est, quod latine dici non possit! Et tamen dabo veniam in quibusdam paucis admodum peregrinis et recondites, si nequeant commode in latinum traduci. Enim vero, quorum optima habemus vocabula, ea in greco relinquere ignorantissimum est. Quid enim tu mihi «politiam» relinquis in Greco, cum possis et debeas latino verbo «rem publicam» dicere?” L. Bruni, *Sulla perfetta traduzione*, a cura di P. Viti, Napoli: Liguori, 2004, p. 120, pp. 208-211. Cfr. Hankins, “Exclusivist Republicanism”, p. 465; Schütrumpf, *The Earliest Translations*, pp. 28-64.
- (45) Hankins, “Exclusivist Republicanism”, pp. 465-466.
- (46) Hankins, “The dates of Leonardo Bruni’s Later Works”, pp. 11-20.
- (47) A・ガンベリーニは『政治学』の訳語の選択にブルーニの政治的な意図を見いだしている。A. Gamberini, “Leonardo Bruni traduttore militante. Echi della polemica anti-signorile nei *Politicorum libri octo*”, in *Ingenita curiositas. Studi sull’Italia medievale per Giovanni Vitolo*, a cura di B. Figliuolo, R. Di Meglio, A. Ambrosio, vol. II, Battipaglia (Napoli): Laveglia & Carlone, 2018, pp. 805-817.
- (48) Hankins, “Exclusivist Republicanism”, p. 464. 中近世ヨーロッパにおけるアリストテレス『政治学』の受容については、皆川卓「アリストテレスが結ぶヨーロッパーポリティアからレスプブリカへ」小倉欣一編『近世ヨーロッパの東と西』106-123 頁。ブルーニによる訳語の選択も紹介されている（109 頁）。
- (49) Schütrumpf, *The Earliest Translations*, p. 46; Moatti, *Res publica. Histoire romaine de la chose publique*, pp. 65-67.
- (50) Hankins, “Exclusivist Republicanism”, pp. 465-466.
- (51) とはいえ、人文主義者の著作のように多用されることはなかったと推測される。例えば、*Diario fiorentino dal 1450 al 1516 di Luca Landucci continuato da un anonimo fino al 1542*, a cura di I. Del Badia, Firenze: Sansoni, 1883（邦訳は、ルーカ・ランドウッチ『ランドウッチの日記』中森義宗・安保大有訳、近藤出版社、1988 年）に *repubblica* は見当たらない。ただし、15 世紀にフィレンツェの都市民が著した叙述史料は膨大な量に上るため、網羅的な検討は困難である。
- (52) “Essendo la guerra aspra e perversa tra la nostra Repubblica e Gian Galeazzo primo Duca di Milano... Adunque il detto Duca, forse spaventato da tanti movimenti di repub-

- bliche e di signori, s'accordò alla detta pace". G. Cavalcanti, *Istorie fiorentine*, a cura di C. F. Polidori, Firenze, vol. II 1839, p. 561.
- (53) M. Palmieri, *Vita civile*, edizione critica a cura di G. Belloni, Firenze: Sansoni, 1982. 抄訳は、マッテオ・パルミエーリ「市民生活論（第2巻）」根占猷一・高津美和訳、池上俊一監修『原典イタリア・ルネサンス人文主義』、503-536 頁。
- (54) "Che meriteria adunque uno che andassi tentando d'ammazzare e guastare questo Consiglio? Certo meritaria quella medesima pena che merita colui che ammazza il re o il principe. Se colui che ammazza un uomo merita la morte, che ne va a chi ammazza uno commune o una repubblica?". G. Savonarola, *Prediche sopra Amos e Zaccaria*, a cura di P. Ghiglieri, Roma: Angelo Belardetti, vol. I, 1971, p. 151.
- (55) 医師、人文主義者であったサヴォナローラの祖父ミケーレの著作 *De vera republica* (1460 年頃) から、知識人のあいだですでに *respublica* が「共和政」の意味で広まっていたことが知られる。Hankins, "Exclusivist Republicanism", pp. 471-472.
- (56) J. Ch. Lünig (ed.), *Codex Italiae diplomaticus*, 4 tomm., Francofurti et Lipsiae: Impensis Hæredum Lanckisianorum, 1725-1732; J. Dumont (ed.), *Corps universel diplomatique du droit des gens*, tom. 3, Amsterdam, 1726; A. Theiner (ed.), *Codex Diplomaticus Domini Temporalis S. Sedis*, vol. 3, Rome, 1862 など多くの例が見いだされる。
- (57) A. Theiner (ed.), *Codex Diplomaticus Domini Temporalis S. Sedis*, tom. III, p. 384. 因みに、君主政体のミラノは「ミラノ公」Dux Mediolani、共和政体のヴェネツィアは「ヴェネツィア国家」Dominium Venetorum と記されている。イタリア同盟については、R. Fubini, "Lega italica e 'politica dell'equilibrio' all' avvento di Lorenzo de' Medici al potere", in Fubini, *Italia quattrocentesca*, pp. 185-219 など。日本語では、佐藤公美「イタリア同盟における戦争と諸国家システムー15世紀イタリア半島の政治空間」。
- (58) Lünig (ed.), *Codex Italiae diplomaticus*, tom. III, coll. 75-100. 同和約については、Fubini, "Lega italica", pp. 212-213。
- (59) "... ex una parte per Sanctissimam & Serenissimam Ligam, hoc est Sanctitatem Domini nostri Sacram Regiam paternam Maiestatem, Illustrissimum D. Ducem Mediolani, Excelsam Rempublicam Florentinam, et illustrissimum Ducem Ferrariae, et ex altera parte per illustrissimum Dominium Venetorum..." Lünig (ed.), *Codex Italiae diplomaticus*, tom. III, col. 139.
- (60) "Et propter ea tam serenissimus Rex prefatus, quam secum confederate illustrissimus

dominus Ioannes Galeaz Maria, Dux Mediolani et excelsa Respublica Florentina...” E. Carusi (ed.), *Dispacci e lettere di Giacomo Gherardi, nunzio pontificio a Firenze e Milano (11 settembre 1487-10 ottobre 1490)*, Roma: Tipografia Poligrotta Vaticana, 1909. p. CIV.

- (61) Cfr. J. Ch. Lünig (ed.), *Codex Italiae diplomaticus*, tom. III.
- (62) マキアヴェッリ『君主論』河島英昭訳、岩波書店、1998 年、13 頁。“Tutti gli stati, tutti e' domini che hanno avuto e hanno imperio sopra gli uomini, sono stati e sono o republiche o principati”.
- (63) 当該期の外交に関する近年の基本文献として、I. Lazzarini, *Communication and Conflict: Italian Diplomacy in the Early Renaissance, 1350-1520*, Oxford: Oxford Univ. Press, 2015。
- (64) さらに、「フィレンツェのポーポロとコムーネの」populi et communis florentini というプリオーリに付随する慣用表現から「コムーネの」et communis の表記が、その方が「耳に心地よい」melius sonat という理由で、削除されている。N. Rubinstein, “Florentina libertas”, in N. Rubinstein, *Studies in Italian History in the Middle Ages and the Renaissance, vol. I: Political Thought and the Languages of Politics. Art and Politics*, ed. G. Ciappelli, pp. 286-287.
- (65) Cfr. J. Ch. Lünig (ed.), *Codex Italiae diplomaticus*, tom. III.
- (66) R. Fubini, “Potenze grosse” e piccolo stato: origine della separazione nelle formulazioni politico-cancelleresche.”, in R. Fubini, *Politica e pensiero politico nell'Italia del Rinascimento. Dallo Stato territoriale a Machiavelli*, Firenze: Edifir, 2009, p. 37. 条約本文は以下に所収。N. Rubinstein, “Firenze e il problema della politica imperiale in Italia al tempo di Massimiliano I (Continuazione e fine)”, «Archivio storico italiano» 116-2 (1958), pp. 175-177 (Appendice).
- (67) Rubinstein, “Firenze e il problema della politica imperiale”, p. 177.
- (68) この称号は通常、「フィレンツェ共和国の公」duca della Repubblica fiorentina、あるいは、さらに単純化されて「フィレンツェ公」duca di Firenze と記されるが、ヴェネツィアの元首 doge に準じた duce が正しい。N. S. Baker, *The Fruit of Liberty. Political Culture in the Florentine Renaissance, 1480-1550*, Harvard Univ. Press, 2013, p. 153, p. 331 (n. 32).
- (69) Hankins, “Exclusivist Republicanism”; G. Pedullà, “Humanist Republicanism”.
- (70) “Nome generale, che significa stato di Città libera, governato da popolo, per ben comune”. Accademia della Crusca, *Vocabolario degli Accademici della Crusca*,

Venezia: Iacopo Sarzina, 1612, p. 695. マキアヴェッリはしばしば città を「国家」と同義で用いているが、この用法は 17 世紀に入っても見られる。シャポー『ルネサンス・イタリアの〈国家〉・国家観』、154 頁。